

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

松山遺跡



昭和54年度

浪岡町教育委員会

## 発刊の辞

浪岡町には、国の史跡指定を受けている浪岡城跡をはじめ、数多くの遺跡が町全域にわたって分布しています。

このたび、周知の遺跡である松山遺跡が、土木工事等によって埋蔵文化財に影響を及すことがわかりましたので、当教育委員会では文化財保護の立場から、緊急発掘調査を実施することになりました。

本書は、その調査の成果を収集したものです。調査によって検出された遺構・遺物によって遠い縄文人の生活の一端をかいまみることができたと思います。

本書の刊行がいさかでも文化財保護および研究の一助になれば幸いです。最後に調査に参加されたみなさまとご協力をいただいた方々に深く感謝の意を表します。

昭和55年3月31日

浪岡町教育委員会 教育長

村上良民

## 目 次

### 本 文

I 発掘調査にいたる経緯	1	Fig. 1 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
II 発掘調査の経過（調査日誌より）	3	Fig. 2 遺跡の範囲	2
III 遺跡の立地・環境と周辺の遺跡	4	Fig. 3 遺跡の発掘区とグリッド配置図	7
VI 紹介資料	8	Fig. 4 発掘区の層序	5
1. 瓢棺土器No 1	8	Fig. 5 瓢棺土器No 1 実測図	10
2. 瓢棺土器No 2	8	Fig. 6 瓢棺土器No 2 実測図	11
3. 瓢棺土器No 3	9	Fig. 7 瓢棺土器No 3・蓋形土器実測図	12
4. 蓋形土器	9	Fig. 8 フラスコ状ビット実測図	13
V 検出遺構と出土遺物	13	Fig. 9 出土遺物実測図	15
1. SP04（フラスコ状ビット）	13	Fig. 10 壺形土器文様展開図	16
2. SP06（フラスコ状ビット）	14	Fig. 11 石器等実測図	17
3. その他の遺構と出土遺物	17	Fig. 12 土器拓影図	19
4. 松山遺跡の土器について	18		図 版 (Pl.)
IV まとめ	20	Pl. 1 発掘状況・遺物出土状態写真	
		Pl. 2 瓢棺土器他	
		Pl. 3 出土遺物	

### 図 版 (Pl.)

## 例 言

1. 本書は、昭和54年4月2日から4月14日の期間におこなった松山遺跡〔青森県遺跡番号 29026〕の緊急発掘調査の報告書である。
2. 本書は、本文6項目、挿図(Fig.)12、図版(PL.)3をもって構成し、執筆は工藤がおこなった。
3. 挿図・図版は、学生諸氏が作製し、工藤が編集したが不統一の面はご容赦願いたい。
4. 本書に記載する遺跡名は、青森県遺跡地名表(昭和53年度)を参照している。
5. 本書を作製するにあたり、下記の方々ならびに諸機関のご指導を受けた。記して謝意を表わすだいである。(敬称略)

村越潔・葛西勲・高橋潤一・竹野利幸・永井治・工藤秀機・中谷保美・岡田康博  
・菊池賢治・平野敏彦・青森県教育庁文化課・青森県立郷土館・青森大学史学研究会・弘前大学考古学研究室・平賀町郷土資料館

## I 発掘調査にいたる経緯

昭和53年4月、松山遺跡地内の地主山内勇太郎氏が、畑地耕作中偶然に、縄文時代後期初頭の壺棺土器を発見。同年6月、浪岡町文化財保護指導員成田平三郎氏（浪岡町吉内在住）から壺棺土器が発見された由を教育委員会社会教育課の方に連絡があり、確認のため工藤が現地におもむく。出土点とされる場所は、すでに西瓜畑になっており付近一帯耕作のために地山が露出する状態であった。表採品などから縄文時代後期初頭の遺跡であることを確かめ、地主山内勇太郎氏から出土品および出土状態について発見時の状況を聴取した。それによると、壺棺土器と考えられる3個体が、地山を掘り込み並んだ状態で出土したが、耕作時の衝撃によって上半部を中心に破壊が激しかったということである。その中で残存の最も良い1個体は、山内氏が保管し内部の土も残っていたため、粒子状になっていたものの骨の存在も確認することができた。しかし、他の2個体は、浪岡町羽黒平在住の山田実氏の手に渡っていたため、後日まで実物をみることができなかった。

教育委員会としては、同年度から町の事業として始まった「史跡浪岡城跡発掘調査」との関連もあり、縄文時代の貴重な遺産として松山遺跡の発掘調査を考え、予算と耕作等の調整から昭和54年4月頃に調査をおこなう予定をたてた。昭和54年2月21日付にて文化庁長官宛発掘届を提出し、同年4月5日付で受理した旨の通知をうけた。

これをうけて浪岡町教育委員会は、下記の調査要項に基づき発掘調査を実施することになった。

### 調査要項

1. 遺跡の所在地 青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字野脇35番地  
(青森県遺跡地名表 遺跡番号 29026)

#### 2. 調査にいたる経緯と目的

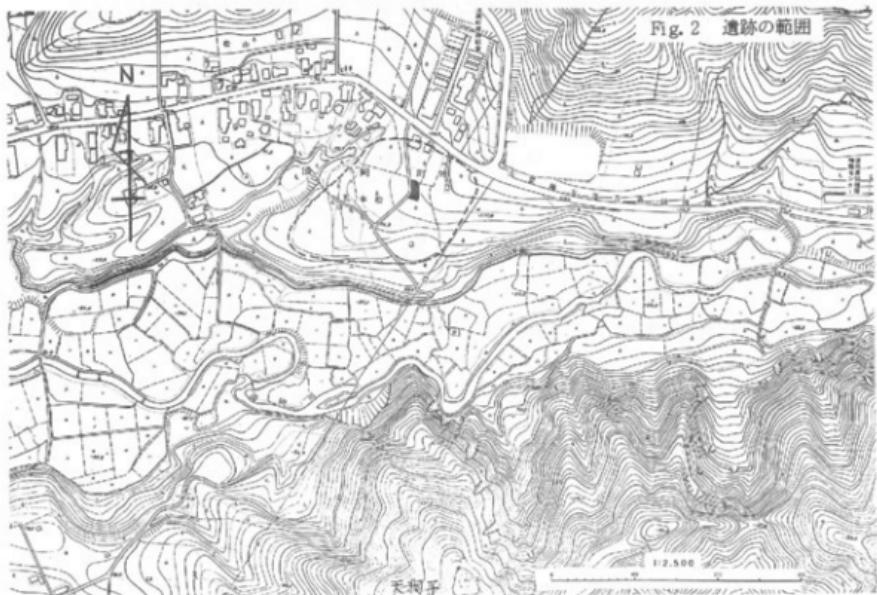
松山遺跡は周知の遺跡として、縄文時代中・後期ならびに歴史時代の遺構・遺物が埋蔵されているとされ、このたび土地所有者山内勇太郎氏が畑地の転作をすることになり、事前に調査をして埋蔵文化財の保護・活用が図られる由の要望があった。浪岡町教育委員会は、上記の要望を達成するため、各関係機関と協議・検討の結果、独自の事業として発掘調査をおこなうこととに決定した。なお、今回の発掘予定地において昭和53年4月に縄文時代後期初頭の骨片を内包する壺棺土器が出土しており、発掘における成果が期待できる。

3. 調査主体者 浪岡町教育委員会 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稻村 101-1

Fig. 1 遺跡の位置と周辺の遺跡



Fig. 2 遺跡の範囲



4. 調査期間 昭和54年4月2日～4月14日

5. 調査参加者

- 顧問 村越潔（弘前大学教育学部教授）
- 発掘作業担当 工藤清泰（浪岡町教育委員会）
- 発掘協力員 中谷保美・岡田康博・菊池賢治・平野敏彦（弘前大学考古学研究室学生）、竹野利幸・永井治・工藤秀機（青森大学史学研究学生）
- 発掘作業員 秋元ヨツエ他6名（地元住民）
- 事務局 浪岡町教育委員会 社会教育課
  - 教育長 村上良民 社会教育課長 小笠原武芳
  - 社会教育係長 木村鉄雄 社会教育主事 木村文男
  - 社会教育課職員 長谷川理

6. 調査の方法

- 発掘予定面積 150 m<sup>2</sup>

○発掘方法

- a. グリッド方式により、2m×2mを1単位とする。
- b. 係分担を決めて効率的な発掘をする。ex. 遺物係、写真係、図面整理係。
- c. 遺物略記 土器（P）、石製器（S）、骨等（B）、鉄製品（F）
- d. 整理作業は、浪岡町教育委員会が発掘作業終了後おこなう。
- e. 報告書は、浪岡町教育委員会が年度内に刊行する。

## II 調査の経過（調査日誌より）

3月26日 工藤が発掘予定地内をテストボーリングする。

3月29日 午前、寒風の中、弘前大学学生中谷・岡田・菊池と工藤にて、発掘予定地周辺の平板測量（2mセンター）及びグリッドの設定をおこなう。基準杭は標高76.64m、グリッドは2m×2mを1単位とし、東西線を算用数字表示、南北線をアルファベット表示として、南北線は磁北と同一方向である。（Fig. 3参照）

4月2日 調査開始。人夫さん7人、弘大生4人の小規模な調査である。午前、テストグリッドを数箇所掘り下げるうちに、土砂の削除がかなり激しいことが判明、遺構の検出は容易ならざる事態であると認められた。

4月3・4日 （雪が降り積り作業中止。）

4月5日 表土層が薄く面積も狭いため、本日の作業終了時点ではほぼ遺構検出面までの掘

- り下げ終了。遺構は、ほとんどがピット状であるためSPの略称を使用、SP01～06まで検出。
- 4月6日 SP04を掘り下げるに、完形の環状土製品が出土し、フラスコ状ピットの様相を呈してきた。
- 4月7日 SP06の掘り下げ。小壺出土。SP04と同様フラスコ状ピットの様相を呈す。SP01・SP02・SP03の精査終了。
- 4月9日 SP04の断面図を作製して精査終了。
- 4月10日 発掘区のセクション図作製のためEライン（東西）9・11ライン（南北）を30cm幅で掘り下げる。SP06覆土中間よりアスファルト接合痕を有する壺が出土。
- 4月11日 SP05精査終了。
- 4月12日 雨から雪にかわる天候のため整理作業をおこなう。
- 4月13日 午前、東西セクション図を作製し、SP06の精査終了。午後、南北セクションを作製し、一部埋め戻しを開始する。
- 4月14日 埋め戻しを終了して、遺物・図面・器材等を浪岡城跡調査事務所に運搬する。

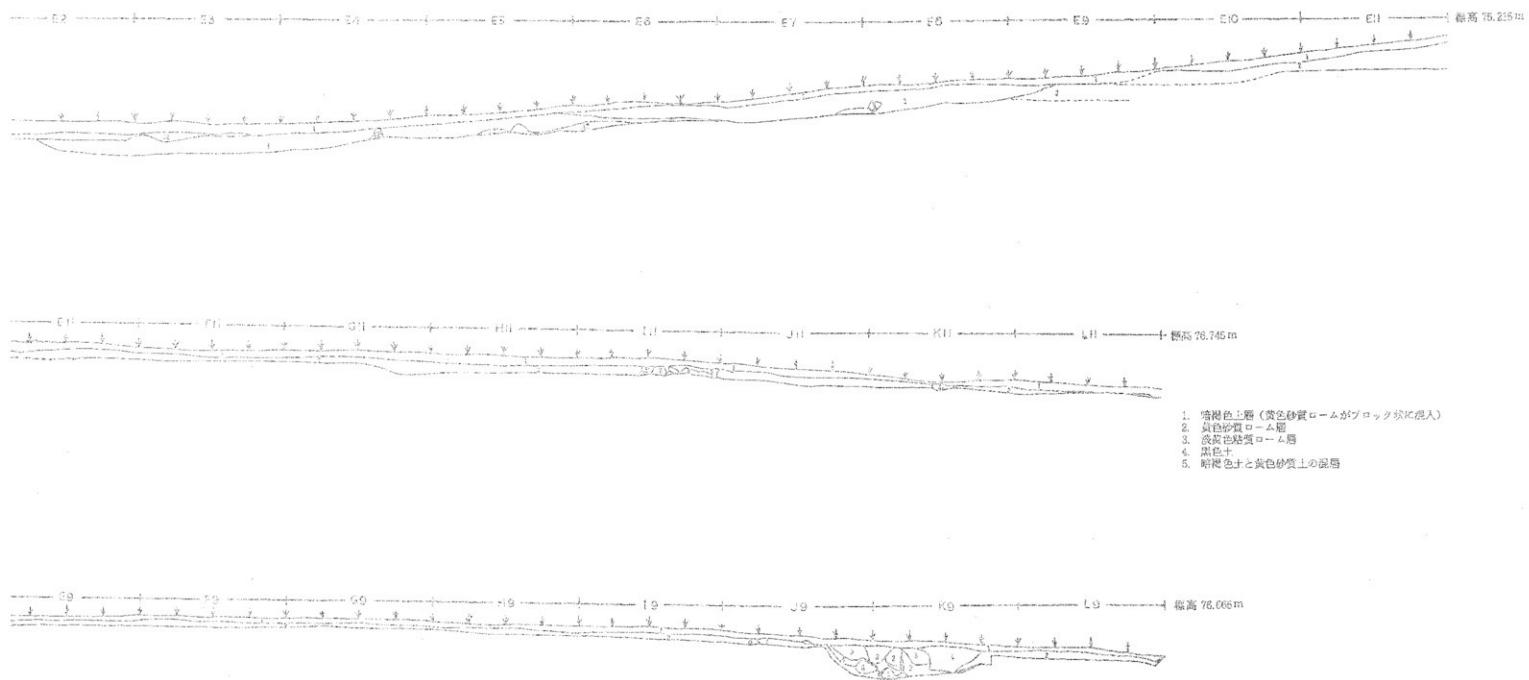
### III 遺跡の立地・環境と周辺の遺跡

まつやま  
松山遺跡〔県遺跡通号29026〕は、青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字野脇に所在し、今回の調査対象となった地域は五本松字野脇35番地内である。遺跡は、北東に存在する高頭森山（標高233.2m）からのびる丘陵上の傾斜地に立地し、標高は約75m、南側を東西に流れる浪岡川より20mの比高を有する。

遺跡は、県道青森－浪岡線の南側に隣接して、現在は全体がりんご園となっている場所に存在する。（Fig.3参照）表探などによって確認した結果では、遺跡の範囲として発掘区を中心と南側のテラス部分、県道を隔てて対峙する斜面、西側の小さな沢を隔てた丘陵（松山寺遺跡として遺跡台帳に登録、県遺跡番号29026）からも同時期の土器片を採集しており、広範な遺跡として有機的関連が想定される。

周辺の遺跡としては、大正6年に笠井新也氏によって調査された天狗平遺跡〔同遺跡番号29028〕が浪岡川を挟んで対峙する丘陵上にあり、本遺跡出土の壺棺土器と同様のものが出土しているといわれる。他に、縄文時代後期の遺跡としては、青森市寄りの河岸段丘上にある王余いざわ魚沢遺跡〔1〕・〔2〕・〔3〕〔同29029, 29030, 29031〕、浪岡川の下流北側にある羽黒平遺跡〔1〕〔29017〕、正平津川上流の細野遺跡〔同29034〕、沖積平野と八甲田山系より連なる丘陵の接点にある杉の沢遺跡〔同29038〕があり、一様に丘陵上に立地する特徴を有している。

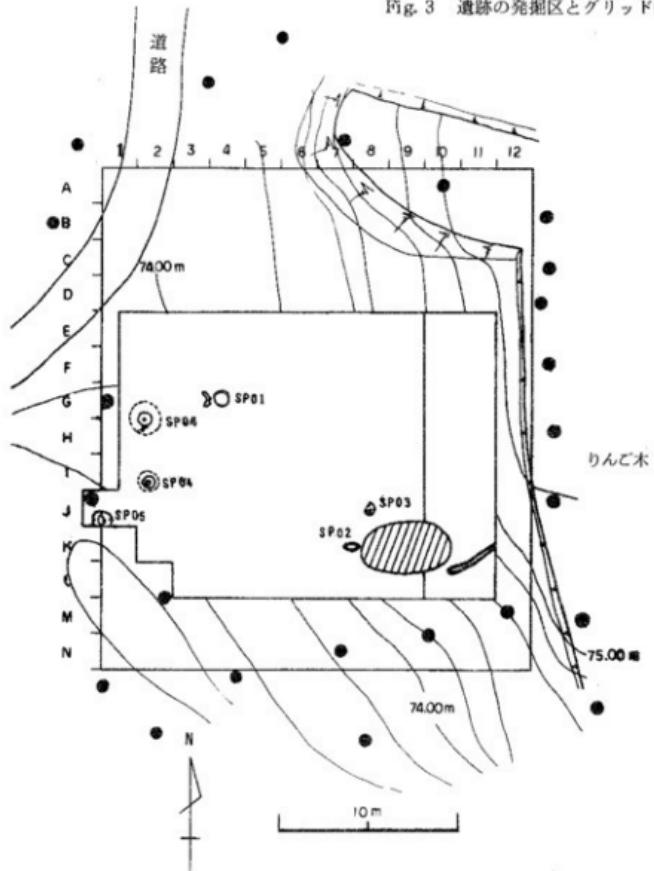
図4 発掘区の順序



また、後期に続く晩期の遺跡として源常平遺跡(同29027)、羽黒平遺跡(3)(同29019)などがあり、前述した遺跡に隣接しながらより沖積平野に近い場所に存在することは、遺跡立地の変遷から興味深い点である。

なお、源常平遺跡、羽黒平遺跡(1)、杉の沢遺跡に関しては、東北縦貫道建設に伴い県教育委員会文化課による発掘調査がおこなわれ、いづれも平安時代の集落跡を主体とする遺跡であり、報告書も刊行されているので参照されたい。

Fig. 3 遺跡の発掘区とグリッド配置図



## IV 紹介資料

前述したように、3個体の壺棺土器および蓋形土器は調査による出土品でないため、出土状態等は詳述できず、調査の記述に先立ちこれらを実測図・写真によって紹介する。

### 1. 壺棺土器No.1(Fig. 5, Pl. 2-1)

出土壺棺土器の中で唯一口縁部まで把握可能な個体である。器高50.5cm、器幅32.3cm、底径15.4cm、口径は推定13.0cmを計り、かなり胴長なタイプの形状を示す。胎土は石英質の小砂を含み、断面観察によると外側は明るい黄褐色を呈するが、内部は暗灰色で焼成時の温度差が認められる。器体内面の色調は、全般的に黄白色を呈するのに対し、外面はやや赤味がかった黄白色の部分と暗灰色を呈する部分に分かれ。成形は、輪積み技法を用いているようで、底部から胴部上半にかけて、ゆるやかな凹凸がみられる。しかしながら、内外面とも仕上げ段階の整形に関しては、ヘラ状のもので丹念にナデられた痕跡を有し、他の器種とは一線を画す面を持っている。

口縁部は、単純にせばまりながら立ち上る形で、文様などは施されない。口縁部のやや下に縦位の穿孔を有する突起（あるいは把手）が存在する。この穿孔を有する突起は4箇所にあつたと考えられ（接合はしないが同種の破片が存在している。）器体の運搬・移動のための紐を通す機能が推測される。底部は、平底で中央部がやや肉厚である。

文様は、胴部上半に偏在し、器体の最大幅を有する部分と突起の下に施した2条一対の平行沈線の間に、S字状あるいは巴状の入組沈線文を施している。横位に巡る沈線の間には、部分的に区画がみられ、四分割と推定されるが、入組沈線文も4単位の構成になっており、符合する面がある。

\*この壺棺土器に残存していた土の中には、明らかに骨と判別できるものが存在していたが、微細な粒子状になっていたため鑑定はできなかった。

### 2. 壺棺土器No.2(Fig. 6, Pl. 2-4)

残存部器高44.0cm、器幅41.4cm、底径17.0cmを計り、推定器高は55.0cmほどと思われる。No.1に比較すると、かなり幅のある器形である。胎土は、石英質の小砂および他の砂を多く含み、（断面観察では焼成ムラがなく）一律に明黄褐色を呈する。色調は、外面が黒っぽい黄褐色で特に底部から胴部にかけて黒色の部分が多い。内面は全般に明るい黄褐色を呈する。成形は、輪積みにより、内面は横位にナデ調整の後縦位に調整するという念入りさである。外面は特に

磨きをかけている部分もあり、若干光沢をはなつ。

復元可程で、接合はしなかったものの口縁部とみられる破片が存在し、口縁より 5 ~ 6 cm 下に幅 2 cm 高さ 1 cm ほどの隆帯を巡らせていていることを確認した。

文様は、前述した甕棺土器 No. 1 と同様肩部上半にみられ、2 条一対の横位平行沈線によって区分された上・下 2 帯の中に巴状入組沈線を施している。巴状入組沈線文は、残存部から推察すると上下 8 単位によって構成されるよう（5 単位まで確認）、文様の割り付けが No. 1 の 2 倍という類似する点がみられる。ただ、巴状文様の作画に関しては、同一パターンのくりかえしではなく、一箇所だけくずれのみられる部分があり、作画の勢いの中に製作者の奔放な意識が感じられる。

### 3. 甕棺土器 No. 3 (Fig. 7 - 1, PL. 2 - 2)

肩部下半より底部までしか残存しておらず、底径 15.7 cm、最大幅 33.3 cm を計るもので、甕棺土器 No. 1 と同じタイプの器形と推定される。胎土は、小砂を含み、焼成不良のため断面内部が暗灰色、その両側が乳白色から黄褐色を呈する。色調は、内面が黄白色で均一なのに対し、外表面は部分的に黒斑を有して明るい黄褐色を呈する。内面は横位調整を施しているが、前述の 2 個体に比較すると粗雑である。

文様部分が欠損しているため、詳細はわからないが、No. 1 と同一意識の制作品と考えられる。

### 4. 蓋形土器 (Fig. 7 - 2・3, PL. 2 - 3)

Fig. 7 - 2・PL. 2 - 3 は、最大径 20.3 cm、上端径 17.3 cm、高さ約 4.3 cm を計る蓋形土器で、3 分の 1 ほど欠損している。胎土は、小砂を含む粗い粘土を使用しており、焼成不良のため部分的に胎土内に暗灰色を呈する。外表面は、暗黄灰色の色調を呈し、磨きをかけている部分があつて鈍い光沢をはなつ。内面は、全般に黄白色の色調で、ナデによる横位の調整がなされている。

施文は、外面上部に 3 本（あるいは 4 本か）の沈線を同心円状に回し、側面にも 2 条の沈線を巡らすという単純な構成である。

Fig. 7 - 3 も同一の特徴を有する蓋形土器の破片であるが、前述のものとは別個体である。

※ 上記の甕棺土器等が出土した地点は、Fig. 3 の斜線範囲と推測される。発掘調査では、本地点における層位状態の確認をおこなったが、発見者が甕棺土器取り上げのため周囲を擾乱してしまい（Fig. 4 の J・K - 9 区層序参照）、原形をとどめない状態だった。

Fig. 5 豊棺No.1 実測図

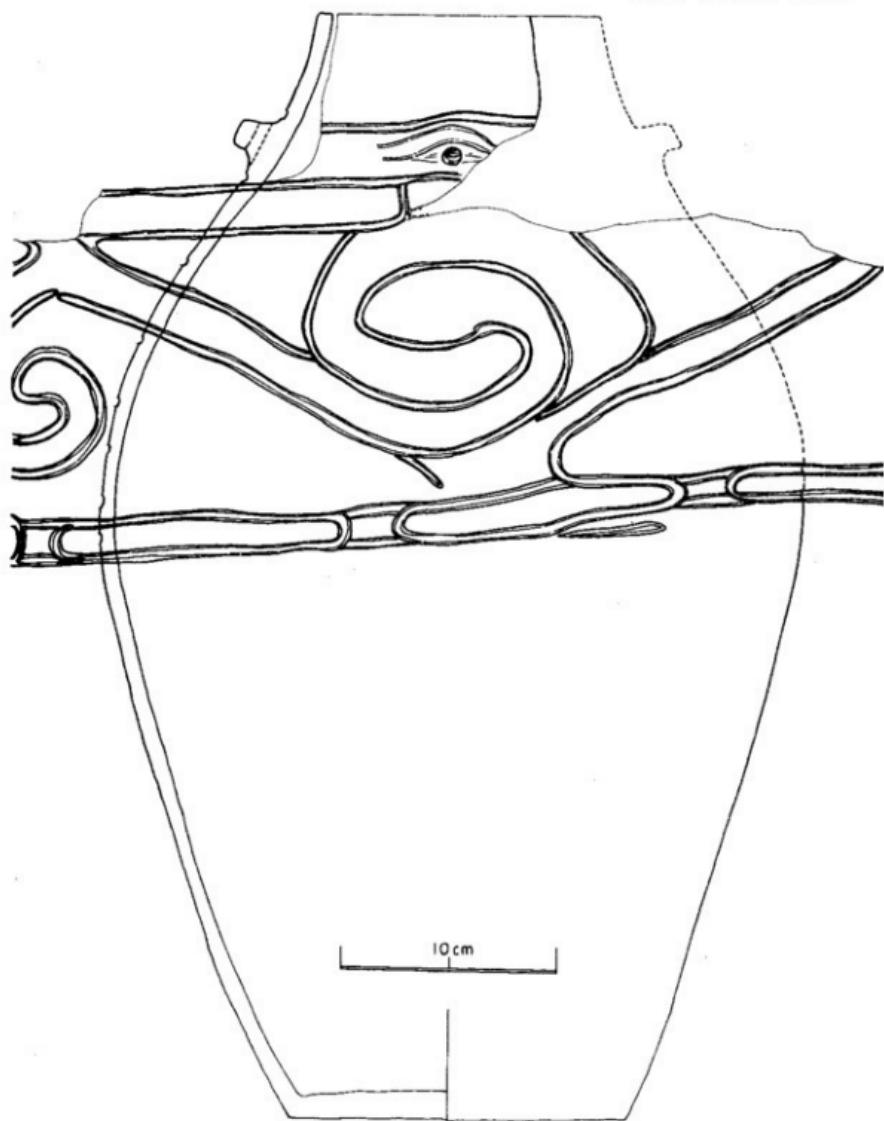


Fig. 6 肥館No.2 実測図

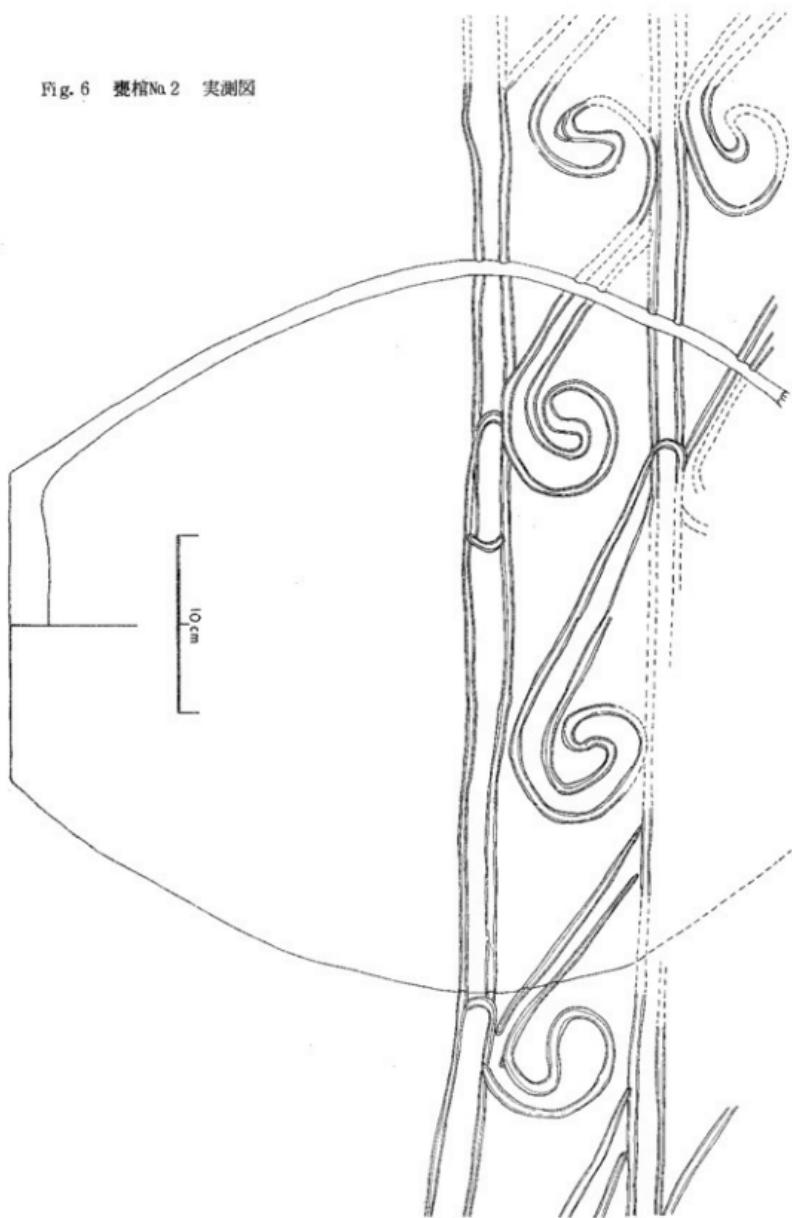
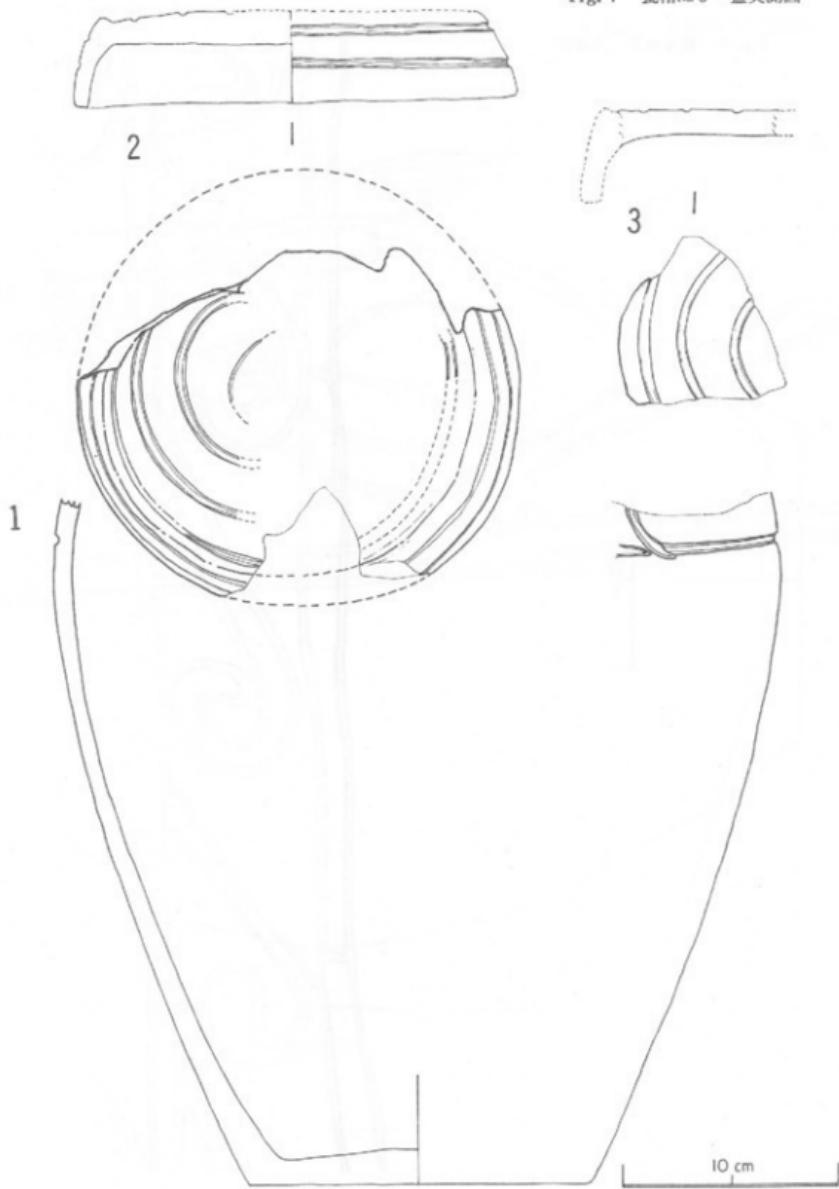


Fig. 7 壺棺No.3・蓋実測図



## V 検出遺構と出土遺物

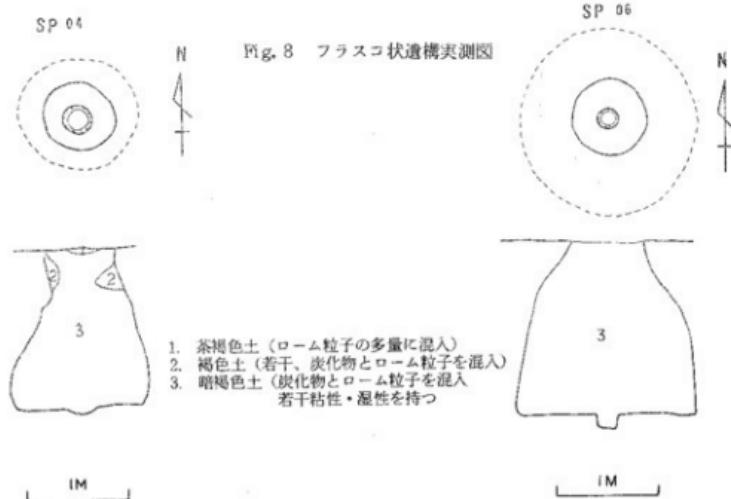
今回の調査の主目的は、前述した壺棺土器の出土地点・出土状態の把握と周辺における遺構の調査であった。前者は、予想以上に搅乱が激しかったため期待を裏切られる結果となったが、後者に関しては、フラスコ状ピット2基の精査とその出土遺物によって若干の成果をあげることができた。

発掘区において検出した遺構の中で、SP01・SP02・SP03・SP05は、いづれも深さ20~10cmの浅いピットで、遺物も土器片数点が出土しているのみで、詳述を割愛し、SP04・SP06としたフラスコ状ピットに焦点をあてて述べようと思う。

なお、発掘区城は東側より西側へ緩い傾斜をなし、東側における土砂の削除が激しく、西端に位置したSP04・SP06の2基のフラスコ状ピットは、かろうじて搅乱をまぬがれたものである。(Fig. 3・4 参照)

### 1. SP04 (フラスコ状ピット) (Fig. 8)

検出区は11区、口径70×64cm、底径120×107cm、深さ155cmを計り、堆積は一時期に埋め戻した状態を示し、第3層とした暗褐色土がほぼ全般を覆う。底面中央に直径約30cm深さ6cmの円形ピットが確認された。



出土遺物としては、覆土上面から数個の川原石と併出した環状土製品（PL. 1-4 参照）、底面付近から出土した酸化鉄の薄片塊（籠胎漆器に塗られたものか）などがある。

環状土製品（Fig. 10-4, PL. 3-4）は、完形品で外径 9.8cm、内径 4.2cm、幅（高さ）4.8cm を計り、360g の重量を有するものである。成形は、3~4 本の粘土紐をあわせて輪状にまるめたドーナツ状を呈し、胎土は、石英質の小砂を多量に含み、全体に明黄褐色の色調である。

施文は、沈線文と刺突文より構成される。上下内径の周りに 2 条の沈線を同心円状に施し、その間に 2 条一対の沈線を「S 字」あるいは「逆 S 字」状に 5 単位割り付けている。刺突文は、内径の周囲を巡る内側の沈線上に、11 個と 13 個施した他、側面には無意図的に施している。沈線と刺突の施文具は、同一の棒を使用しているらしく、沈線幅と刺突径はほぼ同値を示す。全体に施文は粗雑な印象をうけ、沈線文・刺突文の磨滅がみられる部分もある。

同時期における環状土製品の山土例をみると、県内では、十腰内遺跡・近野遺跡・小金森遺跡・堀合 1 号遺跡・螢沢遺跡などがあり、一般的に外径 10cm 以内のものが多く、用途・機能については不明な点が多い。

酸化鉄の薄片塊は、約 4cm 四方の範囲で確認されたが、器形を推定できるまでには至らず周囲の土ごと取り上げた。なお同一層位からは炭化物が多量に併出している。

石器としては、先端が欠損している縦形石ヒ（Fig. 9-3・PL. 3-6）が 1 点出土している。

## 2. SP06 [フラスコ状ピット] (Fig. 8)

G+H 1+2 区より検出され、口径 75×72cm、底径 185×175cm、深さ 172cm を計り、堆積状態は同一土層に覆われ、意図的な埋め戻しと考えられる。SP04 と同様底面中央に直径 20cm、深さ 16cm の円形ピットがみられる。

出土遺物としては、壺形土器が大小 2 個、台付土器の台部等が出土している。

(a) 覆土上面から出土したものとして、口縁部を欠損している壺形土器（Fig. 9-2, PL. 3-2）があり、やや倒立した状態で出土した。（PL. 1-5 参照）底部から胴部にかけては明黄灰色、胴部から口頭部にかけては黒色に近い色調を呈し、胎土には石英質およびその他の小砂が多量に含まれている。胴部最大幅部分より上半に、磨消繩文を伴う入組沈線文が施され、3 条一対の沈線区画の中に燃りの細い斜繩文が、擦り消されるように存在する。これは、施文後、部分的にミガキをかけたためと考えられ、光沢を有する所が存在することからも推測できる。また、器体外面の一部および底部は、故意に削り取られた様相を呈している。残存高 8.2cm、最大幅 9.6cm。

(b) 覆土の中間地点から、胴部下半から底部にかけて欠損している壺形土器（Fig. 9-1, PL. 3-1）が横位の状態で出土した。（PL. 1-6 参照）口径 11.5cm、胴部幅 25.0cm を

Fig. 9 出土遺物実測図

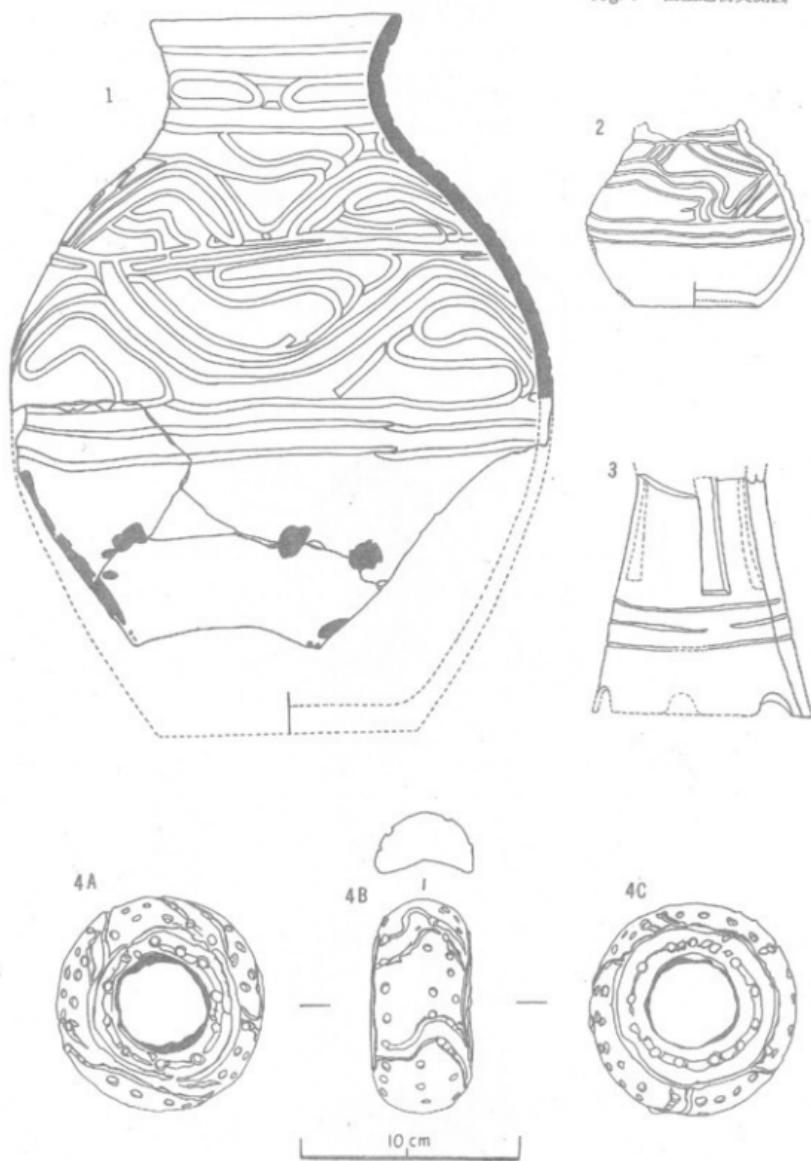
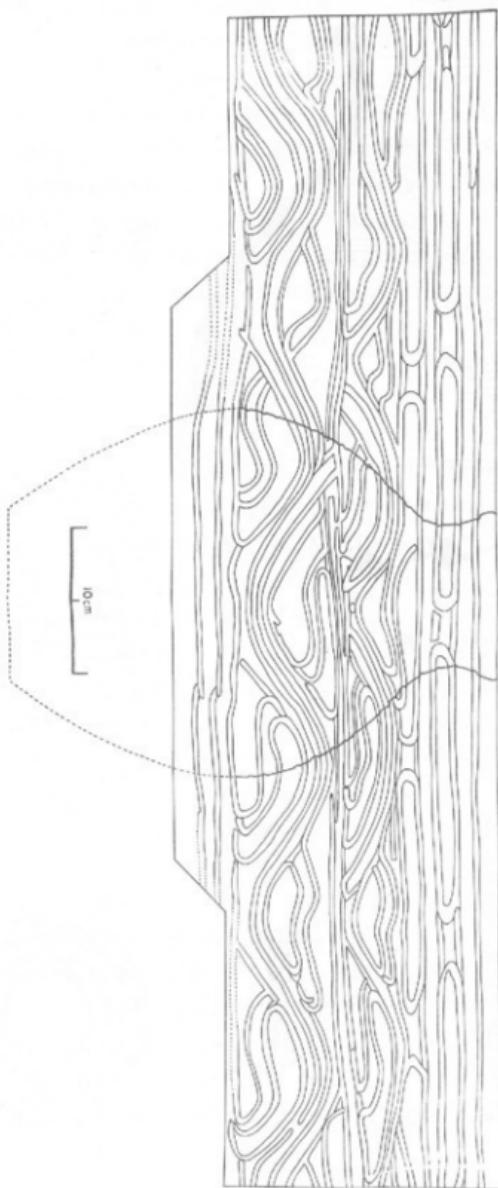


Fig. 10 壺形土器・文様展開図



計り、器高は推定32cmである。器体外面は、全体に白っぽい黄褐色の色調を呈し、胎土は小石を含んで、焼成不良のためか軟質な状態を示す。施文は、胴部上半から口頸部にかけてみられ、展開図(Fig.10)でもわかる通り、沈線を胴部は上下2帯、口頸部は1帯の中に4単位づつ割り付けする複雑な入組文によって構成している。入組文のモチーフは、三角形を基本とした波状文である。

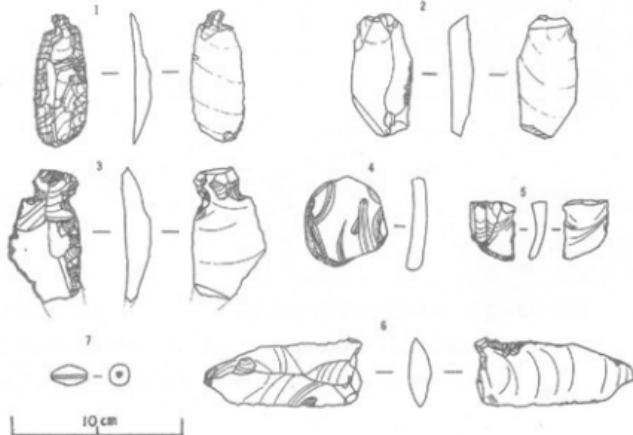
また、この壺は、ヒビ割れた部分をアスファルトによって補修・接合している痕跡を有している。Fig.9-1の黒色部分がそれであり、PL.3-1Bはその拡大写真である。

- (c) 底面付近から出土したものに、台付土器の台部がある。(Fig.9-3, PL.3-3)本体部分がまったく存在しないので、全体器形を推測しかねるが、台部は3方に窓を持ち底部に親指一本分の半円孔を有するものと考えられ、高杯的なイメージが浮ぶ。胎土・焼成とも良好で、全体に赤褐色の色調を呈し、外面はナデ整形がみられる。文様としては、窓の下に細い3条の沈線を巡らしているだけである。
- (d) 石器としては、片面に部分的剥離を加えたもの(Fig.11-2\*5, PL.3-7\*9)があり、いづれも未完成と思われる。頁岩製である。

### 3. その他の遺構と出土遺物

- (a) 円盤状土製品(Fig.11-4, PL.3-11) SP03覆土より出土。土器片を利用して円盤状に整形している。
- (b) 表採品の中に、縦形石ヒ(Fig.11-1・PL.3-5)、石範(PL.3-10)、フレーク(Fig.11-6・PL.3-8)、土鍤?(Fig.11-7)がみられる。

Fig.11 石器等実測図



#### 4. 松山遺跡の土器について

今回の発掘調査によって出土した土器の中で、実測図を載せた以外はすべて破片で、面積が狭かったことと、攪乱部分が多くなったことで量的には平箱1個分という少なさであった。そのため全般的傾向はつかめないかもしれないが、表採品もあわせて松山遺跡における土器文様の構成について若干触れてみたい。

まず第1に、甕棺土器は、その文様要素が沈線文主体であること。一部に隆帯を巡らすものもみられるが(No.2)、口縁部にあることから二次的な意味が強いと思われる。そして、本遺跡に特徴的のことであるが、施文部分が胴部上半に集中し、4分割を基本とする文様単位の割り付けが固守されていること。巴状入組沈線文が文様単位の基本となっていること。これらは、甕棺土器という特殊な土器を作成するうえで、一定の規則性を有していた結果であろうか。

本遺跡における土器の文様構成を分類してみると、以下のような。

A 繩文を施さないもの	B 繩文を施すもの
1. 沈線文のみ施文 a. 潟状・巴状・S字状文(9) b. 平行文(2) c. 入組文(11) d. モチーフ不明(9)	1. 磨消繩文による施文 a. 平行区画文(5・6) b. 入組文(4)刺突文付加
2. 沈線文と隆起文の施文 a. 方形区画文(15) b. 惣円形区画文(1)刺突文付加 c. 入組文(13)	2. 繩文と沈線文による施文 a. 入組文(14)
3. 沈線文と櫛目状文の施文(7・8)	3. 繩文のみ施文 a. 斜繩文(10)
4. 櫛目状文の施文(12)	4. 櫛目状燃糸文による施文(図はない) 〔カッコ内はFig.12のNoである〕

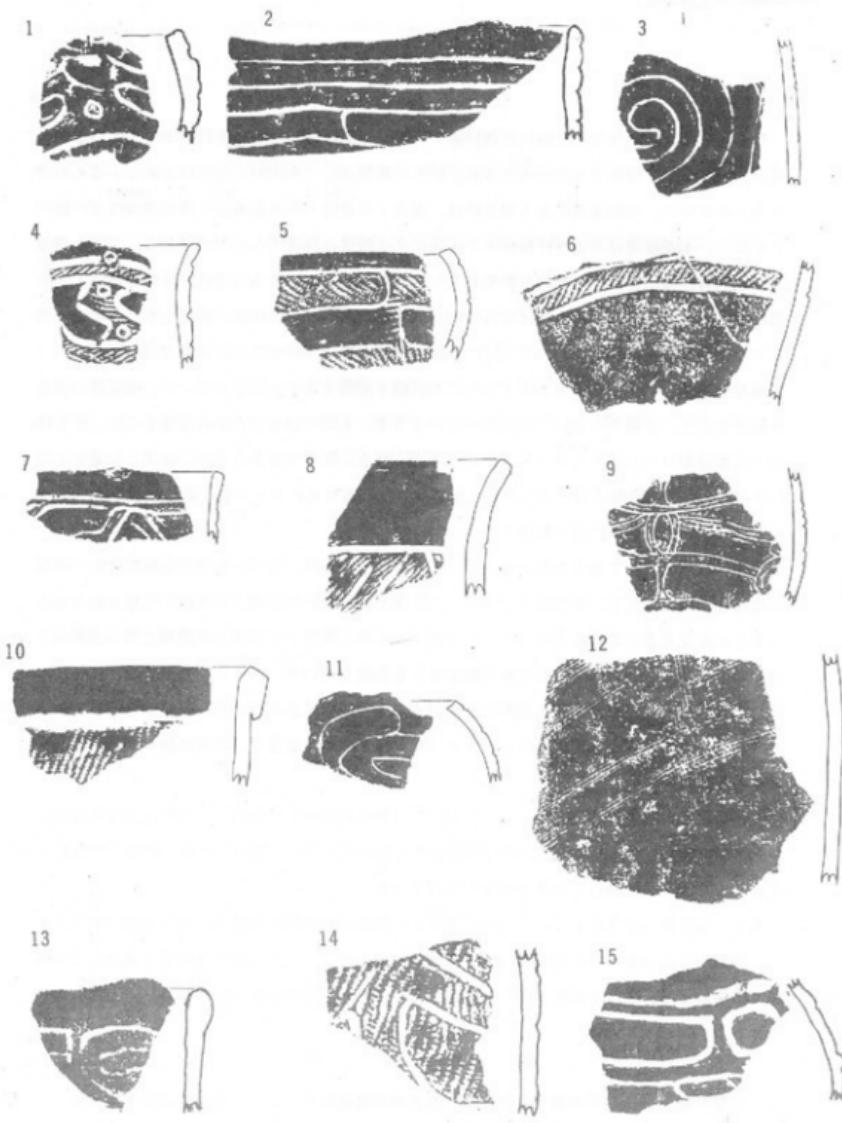
これらの文様構成を器形に則してみた場合、

- 甕棺土器 A 1 a
- 深鉢形土器 A 2 c, A 4, B 1 a, B 2 a, B 3 a
- 浅鉢形土器 A 1 b, A 2 b, A 3, B 1 a, B 1 b
- 壺形土器 A 1 c, A 1 d, A 2 a, B 1 b

となり、甕棺土器以外は、文様構成が器種に関係なくバラエティーに富んだ様相を呈す。

今回は層位的関係も不明確な状態で発掘調査をおこなったため、時間的な差異まで言及できないが、松山遺跡に存在する土器は一般的な意味で十腰内I式の土器群ととらえられると思う。

Fig. 12 土器拓影圖



10 cm

## VIまとめ

松山遺跡出土と同様な縄文時代後期初頭に位置づけられる改葬壺棺土器が出土している例は、青森県内において現在まで29ヶ所とされ、特殊な葬制として全国的にも注目されているものである。その中で、発掘調査による発見例は、堀合I号遺跡・小金森遺跡・眞沢遺跡などの数例しかなく、本遺跡発見のように耕作・工事等による偶然の発見例が大部分である。また、壺棺内より人骨が検出され、科学的分析をおこなう例も少なく、堀合I号遺跡・薬師前遺跡・表館遺跡などは貴重な資料といわねばならない。前述したように、本遺跡の壺棺土器No.1には、若干ではあったが骨片がみられ、発見時に早急な連絡を受けていたならと後悔が残る。

壺棺土器が、いかなる状態で出土したのか詳細を把握することはできないが、発見者の話を総合すると、3個並んでいたのは誤りないようで、土器の破壊状況から推測するに、正立状態で大部分がローム層まで埋まっていたと考えられる。正立であることは、伴出した蓋形土器の存在によって理解され、発見者が土器を掘り上げるためにローム層を約40cmほど掘り下げていることから埋設の状況が類推される。

周囲の調査によって検出された2基のフラスコ状ピットは、いづれも覆土堆積状態が一時期に埋没した様相を呈し、特にSP06に関しては、出土した遺物が破壊された後に廃棄されたとみなすことができる。このことは、フラスコ状ピットが、隣接して存在した壺棺土器へ改葬するための一次埋葬施設と考えることも可能なことを示唆している。さらに、SP04にて出土した環状土製品は、その形態と出土状態から推測するに、副葬品あるいは象徴的機能を有していると考えられ。本遺跡より検出されたフラスコ状ピットに関する限り、非常に精神的色彩の濃い遺構と思われる。

狭い範囲での調査のため、フラスコ状ピットの機能に関する早断はさけなければならない。一次埋葬施設としての石棺・土塗等の問題を考えあわせながら、遺跡の性格・時期・地域差を考慮して今後さらに検討を加える必要がありそうだ。

また、谷を挟んで存在している天狗平遺跡との関係は、墓制と縄文人の生活空間（アリトリ）の問題をはらみ、この時期に後続する晩期初頭の遺跡として多数の土塗墓を検出している源常平遺跡とは、立地と墓制の時間的変遷も重ねて考察してゆかなければならぬと思っている。

### 参考文献

注1 a 萩西勲「青森県下の縄文文化後期の改葬壺棺墓遺跡について」北奥古代文化第6号  
(1974. 5)

- 注1 b 葛西勲「青森市月見野遺跡発見の縄文後期の甕棺と人骨」撲糸文第7号（1978. 12）
- 注2 葛西勲「青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書」（1974. 1）
- 注3 “ 同 上
- 注4 葛西勲「螢沢遺跡」青森市螢沢遺跡発掘調査団（1979. 4）
- 注5 市川金丸「三戸郡倉石村出土の縄文時代後期甕棺土器について（要旨）」青森県考古学会会報第12号（1979. 2）
- 注6 小片保・森本岩太郎・江坂輝称「青森県表館発見の縄文後期初頭の甕棺と人骨」考古学ジャーナル63号
- 注7 前述注1 a ではC型一半地下半盛土型に相当すると考えられる。
- 注8 前述注2 の中の「小金森遺跡」の項に詳しい。
- 注9 市川金丸「水木沢遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第34集（1977. 3）
- 注10 笠井新也「陸奥国発見の石器時代の墳墓に就いて」考古学雑誌9巻2号（1918. 10）
- 注11 成田滋彦「源常平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第39集（1978. 3）

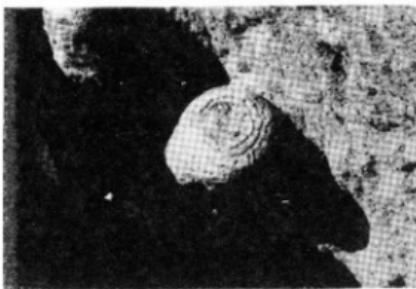
その他の文献として参照したもの

- 今井富士雄・磯崎正彦「十腰内遺跡」 岩木山 （1968. 10）
- 鈴木克彦「中の平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第25集（1975. 3）
- 成田滋彦「近野遺跡（II）」青森県埋蔵文化財調査報告書第22集（1975. 3）





1. 発掘作業風景（天狗平山頂を眺む）



4. 環状土製品出土状態



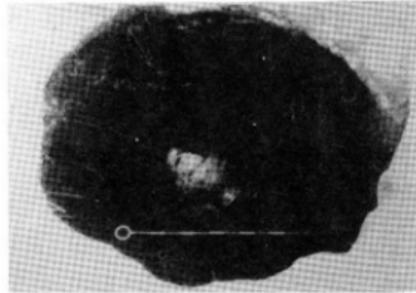
2. 発掘調査区全景（南より）



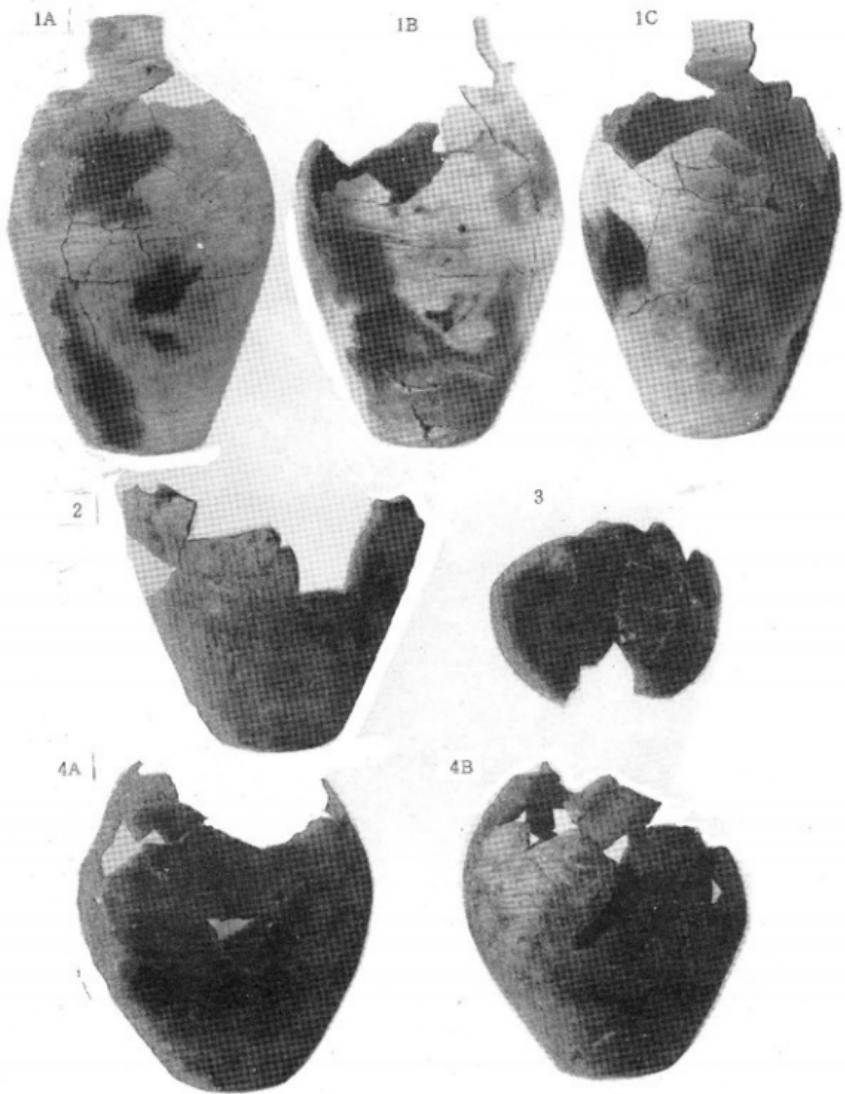
5. 小形壺出土状態（SP06）



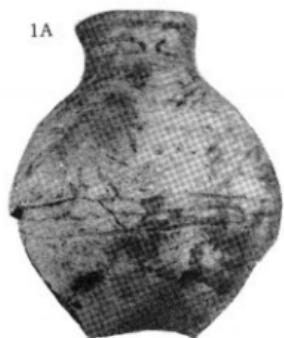
3. 壺棺が出土したと推定される地点



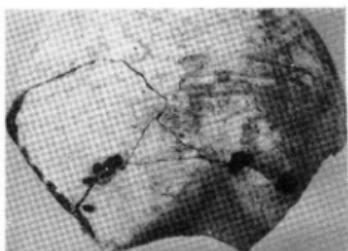
6. 中形壺出土状態（SP06）



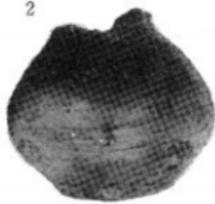
1A



1B



2



3



5



6



7



8



9



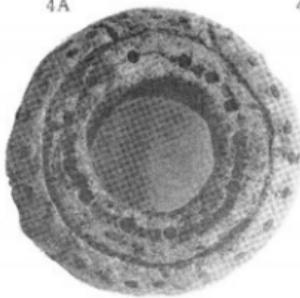
10



11



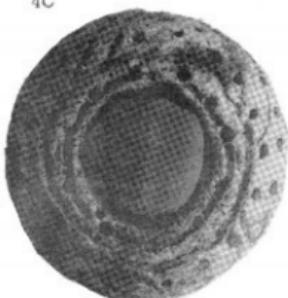
4A



4B



4C



---

## 松 山 遺 跡

昭和55年3月25日印刷

昭和55年3月31日発行

発行 浪岡町教育委員会

印刷 浪岡町 成田印刷

---

